

思い出 ～ 卒業生がみた定時制

亀山高等学校定時制の閉課程に当たって

■第4回（昭和30年）卒業生
後藤 忠生

24年7月25日に、亀山高校スポーツ選手強化育成のための、第26回亀山高校チャリティゴルフ大会が鈴鹿カントリーで開催され、私も参加しました。

その時、福永和伸校長先生に久しぶりにお目にかかり、26年3月、定時制が閉課程になるので「思い出」の寄稿を・・・とお話をいただきました。

閉課程となることを伺い、一抹の寂しさを感じましたが、社会情勢の変化によるもので、いたし方ありません。しかしながら、今日までに多くの卒業生を輩出し、また、各界でご活躍いただいている姿を拝見し、日頃から心よりうれしく思っています。

早速、入学時の62年前、働きながら学んだときのことを振り返ってみますと、在校当時の懐かしさとともに、大変お世話になり今は他界された恩師の先生方への深い感謝の気持ちが湧き上がってまいりました。

「もし、定時制がなかったら、自分の人生はどうなっていたらろうか」「定時制を卒業させていただいたからこそ、今日の自分があるのでは・・・」と思うと定時制を卒業させていただいた有り難さをしみじみと感じています。

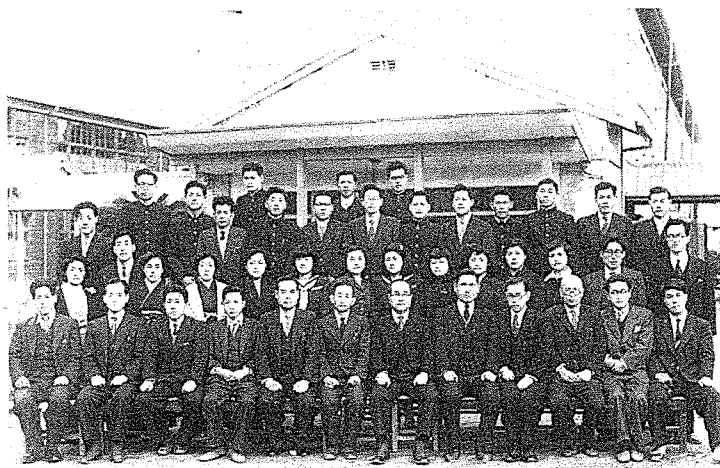
当時の大部分の生徒の方は、父親が太平洋戦争により戦死されたり、また、昭和19年ごろから昭和20年8月の終戦にかけて、県内でも四日市、津など、昼は爆弾攻撃に遭い、夜は焼夷弾の攻撃を受けた家庭が多く、私の父も津で爆死しました。兄は10歳、私は7歳、弟は4歳の3兄弟で、兄は、学制改革により旧制四商から定時制3年に編入し、昼はバスの車掌、私は役所の用務員、弟は文具店の店員、それぞれ働きながら、3人とも定時制で学ばせていただきました。

私たちのクラスは、入学時は40名でしたが卒業時は30名で、転勤や勤務時間の関係で途中退学された方が、10名程ありました。

私と同じ境遇の方が多く、線路工夫、大工、製糸工場の女子工員などをしながら、腹ペコで、脂汗をかきながら授業時間に駆け込んできた方々を思い出します。

帰り道は同じ経路のものが集まり、星空を見ながら「雨にも負けず、風にも負けず」頑張ろうと、宮沢賢治氏の詩を口にして励まし合ったものです。

このように申しますと、いかにも苦学したかのように聞こえますが、学校は、職場から開放されてストレスを解



昭和30年3月卒業生

消するひと時を過ごす場所でもありました。年齢の違いを乗り越えて、生徒会活動や校内ニュースの発行、学芸会など積極的に行いました。お世話になった担任の故菊田栄一先生が普通科に替わられることを聞き、故福岡法重校長先生に留任の直訴を行ったこともありました。

卒業と同時に、ある人は公務員に、警察官に、また家業の後継ぎにと、それぞれの道を選択し社会に雄飛していきました。

それから約60年経ち、わが国は平和で豊かな文化国となり、同期卒業の方は、喜寿そして傘寿迎えられました。仕事が忙しかった時期にはできなかった同窓会も、4年ごとに3回ほど実施いたしました。

今後も、できる限り再会の機会を持ち旧交を温め当時の思い出を大切にしていきたいと思いません。

定時制課程はなくなりますが、私たちは、母校亀山高校を心より誇りに思っています。今後益々の発展を祈念しています。

愛ある四年間

■第20回（昭和46年）卒業生
広野（豊田）かつえ

今から46年前、昭和42年の春、私達37人は、将来の夢をかなえるべく亀山高校定時制に入学しました。37人の仲間の中には、遠く鹿児島・宮崎県から集団就職した7人、富山県から2人、伊勢志摩より住込み看護婦見習いとして働いている者、地元亀山・鈴鹿の企業で就職した私達です。

昼間精一杯働き、時間との競争で授業を受ける毎日ではありましたが、それも今思えば楽しい一面であります。時には机に着くやいなや居眠りする者、遅刻する者、その代わりに代返する者もいましたが、それでも当時の先生方は、叱りはしてもいつも誰にでも優しく愛情一杯に接して下さいました。

外は暗く静かな夜空の中、給食室（パンと牛乳が置いてある）と隣の夜間職員室の灯りは、虫が光に誘われる様に、私達の拠り所であった様に思います。また給食のおばさんがいつも優しく私達を迎えて声を掛けて下さった顔が当時のまま思い出されます。

定時制の仲間がほぼ全員卒業出来たのは4年間担任して下さいました内田先生の熱い愛とバイタリティのお陰で有ると思っております。ご自分の家族の話をして下さったり、又「今君たちは何のために疲れた体で夜間学校に来ているか？勉強は出来なくて良い。中卒と高卒は違うで」と事あるごとに噛み砕く様に話をしてくれました。それでも3年生になって、塗装工をしていた一人が「俺は勉強が頭に入らん」と中退。その時先生が必死に説得しクラスの皆で彼に思い留まる様はたらきかけましたが、職人としての道を選び去って行きました。彼が居なくなった教室は兄弟が欠けた様に静かになり、それからは誰一人中退者を出したくないと思ったものでした。

全日制と合同の体育祭では、定時制が一クラスとして、全員が同じネジリハチマキをし全日制に負けまいと大きな団扇と仮装姿で奮闘しました。その姿を見に勤務先の病院の奥様が応援に駆けつけてくれました。

修学旅行も全日制の生徒と南九州に行きました。これは担任の先生の強い要望で、遠く離れた親御さんへ、亀山高校定時制で頑張っている元気な姿を見せてやりたいとの思いからでした。故

郷へ錦を飾るとでも言いましょうか、生徒達は紺のスーツを新調し面会を終えた後、それはそれは嬉しそうに満面一杯の顔でバスに戻って来ました。宮崎県青島鬼の洗濯板とその笑顔が目に焼きついています。

定時制の仲間が弁論大会に選出された事も有りました。彼女の発表は「雑草のように生きたい」と題したもので、切実に在りのまを熱く語っていました。この時の内容に深く共感し、今も忘れる事はありません。

育った環境や年齢、立場も違う同級生、私達を4年間温かく見守ってくれた先生方と過ごした亀山高校定時制は私の宝です。夜間教室が無くなる事は残念ですが、私の中にある定時制の宝は無くなる事はありません。

最高の時間

■第24回（昭和50年）卒業生

寺 嶋 保 男

私は中学卒業後機械関係に興味があり、自動車のエンジニアになりたくてエンジン再生の会社に就職しました。しかし将来の事を考え中学の勉強だけでは不十分だと考え6年間のブランクがありました。思い切って本学校に行くことにしました。その当時は6歳下の子からおじさんとも呼ばれて毎日楽しく運動及び勉強に奮闘していました。部活では軟式野球部でしたが部員の級友たちと仕事の疲れも見せずにグラウンドで汗を流しました。部員皆で相談して少ない練習時間でも他校に負けじと個々に練習のスケジュールを組み見事大会で優勝できたことが一番の思い出でした。修学旅行ではホテルで騒ぎ当時社会人だった皆が先生に注意されたことが思い出されます。今振り返ると夜間部の4年間は私にとって貴重な経験を積んだ最高の時間でした。平成26年度から定時制がなくなると思うと非常に残念な気持ちですが私の心の中で良き思い出として刻み続けていくことでしょう。

最後に学校関係者の皆様には夜間部継続に当たり長年ご尽力頂き、本当に有難うございました。心よりお礼申し上げます。

亀山高等学校定時制の思い出

■第36回（昭和62年）卒業生

真 川 智 和

定時制があるということを知ったのは、中学卒業前でした。

一日も早く家の仕事がしたくて、高校を断念しようとした所、定時制というものがあることを知りました。仕事も出来、勉強も出来、両立出来る事に胸を躍らせた事を思い出します。状況や環境も分からぬまま5時45分から始まる授業に通う日々が始まりました。教室のドアを開けると、そこに居たのは年齢も出身地も様々な同期生20数人が、机を並べていました。

打ち解けるのに時間もかからず、会話を交わす中、驚いたのは本当に日本全国から集まった同期生でした。それぞれの事情がある中、亀山の定時制を選び共に机を並べる事が出来たことを嬉

しく思いました。普通の高校生が帰る中、入れ替わりに学校へ通うことに恥ずかしさを感じる時期もありました。

1 限目が終わり、次に始まる給食の楽しさは中学時代の給食とは、また違った楽しみがありました。パンと牛乳だけではあったものの、とても美味しく感じました。

6時40分から始まる、その後の授業8時45分まで仕事の疲れと戦い、時には疲労から来る睡魔と戦う時間でした。

一口に、定時制と言えどもこれ程大変な授業時間帯になるとは、思いもしませんでした。また、学校行事の体育祭、様々な競技で競い合い、他学年との交流では、また一段と年の差を埋める場でもありました。

宿泊研修では、共に枕を並べ、思いを語り合う素晴らしい経験も出来ました。

3、4年合同の修学旅行、決められた日数と予算の中で生徒自身で計画する楽しさでも女子が大半を占め、女子目線の修学旅行地になるのも事実です。時には、授業終了後、9時から始まるクラブ活動、限られた数の中での部員確保、重複する部員も多数いました。

1年生の時に、入部した軟式野球部では神宮球場を目指し、萩本欽一氏に会えると頑張りました。

同年、バレーボール部にも属し、県内で優勝して代々木体育館で全国の同志と競う事が出来ました。また、同年柔道部にも属し、日本武道館で同志と技を競うチャンスも頂きました。柔道部においては、4年連続全国大会という快挙を成し遂げ、亀高定時制に伝説を作ったのも思い出します。共に、全国の舞台で授かり、築き上げた全国同志との友情は定時制でしか経験出来ない事だと思います。

本当に、亀山高等学校の定時制に通学出来た事を誇りに思い、感謝します。

また、一社会人であり、一学生である微妙な立場にある私たちにご理解を頂き、連日ご指導頂いた定時制職員関係者の方々にお礼を申し上げます。

ありがとうございました。

平成26年3月まで定時制を存続して頂いた事を重ねてお礼申し上げます。

私たちの中では、亀山高等学校定時制は、永遠です。

亀山高校定時制を卒業して

■第51回（平成14年）卒業生
後 藤 宏 幸

定時制を卒業して約10年の月日がたちますが、在学中はいろいろな経験をさせていただくことが出来ました。今でもよく覚えていることは、定時制は一人一人が様々な理由や生活環境を持っている人の集まりでした。そのような人達と共に生活することで様々な面で良い刺激を受けました。

陸上競技を一緒にする仲間にも出会うことができ、私も全国大会で好成績を修めることができました。しかし、それは私一人の力ではありません。仕事と学業が終わってからのクラブ活動となるわけですが弱音をはかず取り組む仲間の姿に励まされました。定時制の全国大会はお盆休み

の間に行われます。お盆休みを返上して引率していただいたり、遅い時間まで練習のお付き合いをしていただいた顧問の先生を始めとする関係各位の皆様のおかげで良い思い出、良い成績を修めることができました。私自身も仕事と学業とクラブ活動という生活を送っていましたので、精神的にも肉体的にもつらい時があり「1日24時間が25時間、26時間となればいいのに」とか「時間を誰か売ってくれないかな」と、ばかげたようなことを真剣に考えながら生活している時もありました。しかし、それらを乗り越えることができかなりの自信を持つことができました。

それと、亀山高校定時制は外国人比率がかなり高い学校でもありました。いろいろな国の人とふれあうことで、文化や習慣の違う人達との生活はものすごく新鮮なものでした。文化祭の用意で応援旗を作っている時、言葉が交わされないまま身ぶり手ぶりで日本とブラジルの国旗が合わさったような国旗ができあがっていったのは、今でもはっきりと覚えています。あまりうまく日本語が話せない人とは上手に接することができないと思い込んでいた私にとっては人生観が変わるほどの経験でした。「また外人が悪いことをした」などの心無い言葉を耳にすることがありますが、私達も海外へ行けば外国人となります。どんな人とも分け隔てなく接することができるようになったのも、あの経験のおかげだと思っています。

定時制での学校生活は、人生の中でほんの一瞬だったかもしれませんが、そのおかげで本当にたくさんの経験をさせていただくことができました。一度は全日制高校に入学して自分の気持ちをコントロールすることができずに退学になってしまった時は、親に迷惑をかけてしまい申し訳ない気持ちで一杯でしたが、あの退学がなければ亀山高校定時制での生活は無く、今の私は無かったと思います。これまでの経験を生かしてこれから先も自信を持って生活していきたいと思っています。お世話になった先生方ありがとうございました。

違いを超えた出会い

■第57回（平成20年）卒業生

山本（石井）純子

亀山高等学校定時制の卒業生になれた事に感謝します。思い出は数え切れないほどあり、いつまでも心の中で私の力になっています。

入学した時には小学生の息子が2人いましたが今では社会人と高校生です。沢山迷惑をかけながらの高校生活でしたが毎日息子たちに応援されながら通った定時制でした。

受験の日の事は忘れられません。面接では沢山の先生方に囲まれて緊張と不安で一杯だった事を思い出します。でも、順番待ちの教室で声を掛けてくれたのが今でも友達の栗原晴美さんでした。思えば長いお付き合いになりました。

1年生の時に三重県高校定時制通信制生活体験発表会に出させて頂き、驚く事に三重県知事賞を受賞して、東京へ行かせてもらった事も楽しい思い出です。引率の黒川敦子先生と楽しく行ってきましたね。普通に主婦、母親をしていたら何も出来ない経験でした。

18歳で高校中退しての36歳で再高校生ですから周りの同級生との年齢差や経験の違いで随分と戸惑いもありましたが、担任の杉山先生のお陰でクラス皆仲良く出来た事が本当に良かったです。

勉強に付いていくのも大変な思いをしましたが、先生方の授業はとても楽しく毎回学ぶ事が楽しみでした。

行事も沢山で体力的に「これ、無理・・・」と思いつつも、「負けないぞ〜！」って頑張ったりして。校内クラスマッチや、他校交流のソフトバレー大会、バドミントン大会など。

授業で衝撃的だったのが理科で実験中の爆発ですね。少し天井焦げたかなあ。それはもう、驚きと爆笑で忘れられません。

文化祭では全学年各クラス皆が考えた催しがだされ、私もマジック、歌などを披露しました。修学旅行で沖縄に2泊3日で行きました。3年杉山組は本当に仲良くて、どのクラスにも負けない程の連帯感があったと思います。卒業しても悩みを相談できて、食事も行ったり出来る友達が出来たのが大きな宝物です。

担 任 杉山哲夫

卒業生 伊藤宏平 大城レヒーナ 小田ヒロシ 木村マイケル 具志ヤミルカ

栗原晴美 小西達成 福田貴重 山北享平 若林恭太 山本純子

私は入学して目標にしていた方がいました。でもその方は志半ばで他界されてしまい、とてもショックでした。

この方の分も頑張って亀山高校定時制を卒業しないといけない！と強く思いました。追いつく事は出来ませんが、生涯学び、自信となり一生の糧になるようにこれからも頑張ります。

定時制は沢山の人との出会いがある本当に素晴らしい学校です。国籍年齢を超えてお互いを理解しあえる場所です。この亀山高等学校定時制が無くなってしまうのは本当に残念です。形は無くなっても、私の母校です。4年間学んだ事、同級生、先輩、後輩、お世話になった先生方、全てが大切な宝物です。



定時制の思い出

■第61回（平成24年）卒業生
市 妙 映莉子

私は平成20年4月に亀山高校定時制に入学しました。当初思っていたより、クラスの人数が多かったのをよく覚えています。始めの頃は、なかなかクラスに溶け込めなく不安だったのですが、行事に参加するたび馴染めるようになっていきました。

私が印象深かった行事が二つあります。一つ目は、4年の秋に行った日本文化体験学習です。亀山高校だけではなく、県内の別の3校との合同で、京都市の八坂神社へ行ってきました。バス

の中でとても賑やかで、写真を撮ったりして楽しんでいました。私達はメインの八坂神社をはじめ、双龍図や風神雷神図で有名な建仁寺などを散策しました。実物を初めて見るということもあり、しばらく見入ってしまうほど感動した覚えがあります。

もう一つは沖縄の修学旅行です。3年の秋に行ってきました。沖縄は10月にしては暖かく、半袖で丁度良い位の気候でした。沖縄平和記念公園やパイナップルパーク、美ら海水族館、東南植物楽園など2日にかけていろいろな観光地を巡りました。平和記念公園では沖縄戦で亡くなった方の名前が刻んである平和の礎を見て回りました。石碑の数から日本各地から沖縄に集結して戦っていたことがよくわかりました。戦争について深く考えるいい機会になり、とても勉強になりました。

修学旅行で一番思い出深いのは、ホテルから出てすぐのビーチから見る、透き通った青い海です。残念ながらそのビーチで遊ぶ事はあまり出来なかったのですが、朝方に早起きしてビーチから朝日を見に行ってみたら、普通にヤドカリが歩いているのを見つけてビックリしました。そして朝日に照らされて輝く海は絶景で、とても感動しました。沖縄への修学旅行はとても良い経験になり、クラスの皆との交流を深めるいい機会になったと思います。少人数だからこそ一体感が出来、皆が楽しめるクラスになったと私は思いました。

残念ながら亀山高校定時制は閉課程となってしまいますが、クラスでの思い出はこれからもずっと忘れないことと思います。

旧職員からのひと言

宝物の四年間

■内 田 雄 亮 (昭和42～45年度勤務)

定時制と聞いただけで胸が「キュン！」としてくる。そして、目を閉じれば、生徒たち一人一人の満面の笑顔が浮かんでくる。「本当に良くやった！やり切ったなあ！大したものだ！」という思いが感動と共によぎるのである。

私は昭和42年4月～46年3月まで、亀山高校定時制課程で勤務した。そして、一つのクラスを4年間持ち上がったのである。当時私は33歳、初めて担任をした1年生37名の生徒と出会い、その希望に満ちた眼の輝きを見たとき、「この生徒全員に残らず卒業して欲しい！」と思った。当時、折角入学しても勉強と勤務を両立させる辛さに耐えきれず、半数近くが辞めてしまうと聞いていたからである。

私は、『全員卒業』を合い言葉に頑張ろう」と提案し、それに向かって全員で取り組むことにした。そのためには生徒が学校に来るのがとっても楽しいと思うような雰囲気作りが大切だと考えた。

そこで、ホームルームや給食の時間を活用して話し合いをしたり、生徒会や体育祭などの特別活動に力を入れたり、放課後の部活動を奨励したり、生徒の提案を受入れ休日に有志でハイキングをするなどして、思い出作りに努めた。修学旅行では南九州まで足を伸ばして、鹿児島や宮崎出身の生徒の家族と面会出来るようにして貰った。

欠席が続くと家庭訪問をして親の子供への大きな愛に触れたり、本人に事情や考えを聞いて話し合ったりした。全員の職場訪問をして生徒の頑張っている別の姿に感動し、会社の定時制教育への協力に対し感謝の意を伝えた。陰湿ないじめや仲間外れなどはなく、お互いに助け合い、長く休んでいる友達には生徒同志で手紙を書いて励ましたりしていた。全員の努力が実を結び、欠席者は殆ど無く、教室はいつも生徒の元気な笑顔で溢れ返っていた。男女の割合が半々だったこともプラスに働いた気がする。勉強中の私語が少なく態度も真面目なので、先生方から「元気で反応が良く、授業していても張り合いがある」とお褒めの言葉を頂いた。いつも明るく団結力が強かったので、全日制の生徒たちと合同で体育祭や修学旅行をしても、全く引けをとらなかった。若者らしいヤンチャもあったが、これ以上やれば学校や担任・親に迷惑が掛かるという一歩手前で身を引いていた。

その結果、4年後には40名が卒業証書を手にする事ができた。人数が増えたのは5名がリタイアした(残念!)ものの、8名が転校その他で入ってきたからである。

平成24年の春、5年振りに一泊の「還暦同窓会」が開かれたが、東は東京、西は鹿児島から半数に当たる20名が顔一杯に笑みを湛えながら集まり、本当に楽しい一夜であった。その時、多くの卒業生が口々に「これ迄生きてきた中で亀山高校定時制の4年間が一番良かった」と言っていたのが心に残った。

私は今79歳になった。私学を含めて45年間の教員生活を振り返り、生徒たちと共に編集した懐かしいアルバムを見ながら「この定時制の生徒たちに出会って本当に良かった!逆に沢山のことを教えてもらった。『担任をして知る生徒の恩』だなあ!」とつくづく思うのである。

四十年程前のことです

■西 田 芳 文 (昭和44～45年度勤務)

亀山高校。昭和40年4月、教師としてスタートを切った学校です。

亀山高校は全定併設校で数学科教員は着年順に2年間、定時制へというルールがあり、昭和44年4月から働きながら学ぶ4年生の諸君の担任として学校生活を共に送ることになりました。彼らはすでに3年間本校で定時制高校生活を経験しており、「パン・マーガリンと牛乳」での夕食を共にしながら、新入りの私に学校生活のシステムやクラスの雰囲気等を教えてくれました。

男子19名、女子5名の仲間達。国鉄職員、看護婦、職人、商人、会社員。

親方・上司から誉められたこと、叱られたこと、怪我をしたこと、自動車を買ったこと、単車で事故を起こしたこと、商品を誤配したこと、まもなく結婚すること、等々……。いろんな話を聞いたり相談を受けたり。

私の方は27才、社会経験も浅く先輩教師にアドバイスをもらったり、一緒に考えること位しかできませんでした。

学校には1～3年間を共にした仲間がいる。仲間と会うために「おはよう」と声をかけ楽しみに5時すぎに登校し、話に花を咲かせる夕食をはさみ4限終了後、クラブ活動(バレーボール・卓球・剣道など)で大笑いし、9時30分頃に下校して行きます。「さようなら」と言うより『気を付けて帰れヨ!』との声かけがピッタリでした。

数学の授業は、面白そうやなあ、役に立ちそうやなあ、友人に話してみようかなあ、と興味を持ってくれる教材に力を入れました。木や建物の高さは？〔サイン、コサイン、タンゼント〕・数字の列の規則とそれらの和は？〔一般項とシグマ〕・2つの力を合わせると？〔ベクトル〕・瞬間の速さとは？〔微分〕・面積体積を求める？〔求積法と積分〕・当たる当たらない？〔確率〕



秋季小旅行～多度山

4年生の担任としては楽しい思い出作りを考えました。5月に京都嵐山への新入生歓迎旅行、夏休みに鼓ヶ浦海岸でのキャンプ、秋には御在所岳へ紅葉ハイキング、多度山とみかん狩りの小旅行をと仲間みんなで楽しみました。

昭和45年3月卒業式を終え、それぞれの道を一生懸命歩んだことだと思っています。還暦も過ぎてしまったみんな、いつまでも元気でいて欲しいものです。

思い出の断片

■森

直（昭和46～48年度勤務）

この度、亀山高校定時制が閉課程になるとの事、一時でも同校定時制教育に携わった者として一抹の寂しさを覚えます。私が定時制に赴任したのは、昭和46年4月から昭和49年3月までの3年間でした。40年以上前の事で断片的な記憶をたどって、当時の思い出を記したいと思います。定時制教諭は全教科、全日制から2年を目途に交代で赴任していました。私は伊賀市から通勤していましたので、列車通勤が困難とのことで急遽昭和45年自動車免許を取り勤務に備えました。当時名阪国道はまだ二車線で初心者にとって夜の運転はとても神経を使い疲れるものでした。初年度担任を希望しましたが、主事の勝田先生から、担任は時には遅くなる事も覚悟しなければならないから教務の仕事をして下さいとのことで、担任を外してもらい教務兼1年の副担任という形で出発しました。新入生は21名で全校生徒は50数名であったと思います。1年生は全員が昼間職についており、田中病院で当時の准看護婦を目指す生徒と亀山ローソクに集団就職した生徒が主で、あと自営業や町工場で働く生徒もいました。生徒たちはみな純朴で素直に教師の指示に従ってくれ楽しく勤務できました。当時会社の寮で生活する生徒が多く、放課後のクラブ活動は殆どありませんでしたが、授業後に何かの余談で定時制の軟式野球全国大会があり、その県予選があることを話したところ、数名の生徒から是非参加したいので指導してほしいとの申し出がありました。先生方と相談し私が顧問として面倒を見る事になりました。参加生徒は10名ほどで何とかチームが組めました。週3回から4回、放課後10時まで運動場に照明をつけて熱心に練習しました。昼間の仕事の疲れも忘れて、大声で励まし合いながら目的に向かって、皆が一体になった時でした。試合日が近づくと昼の試合に備えて日曜日も練習に励みました。試合は伊勢市であ

り多くの生徒が応援に駆け付けてくれましたが、残念ながら初戦敗退でした。でも全員自分達の出来る事を遣り抜き、初戦突破という目的に向かってチームが一つになったという満足感でいっぱいでした。そのほか、生活体験発表会、夜間の体育祭や文化祭、合唱コンクール、バス遠足など、殆どの生徒が熱心に参加して校内行事を盛り上げてくれました。二度と戻らぬ青春のひと時を、寒い冬はストーブを囲み、パンと牛乳だけの給食で空腹をしのぐという厳しい環境の中、お互い友情に励まされて、勉学や校内活動で頑張ったことはきっとその後の人生に活かされている事と思います。私も時には帰宅が午前零時をまわる事もありましたが、疲れを一切感じることなく生き生きと勤務できました。これは教職員・生徒が家族のように一つになって目的に向かって努力できたからであり、その後の私の教職活動に少なからず影響を与えて頂いた事に感謝しています。



あの頃の亀高定時制

■森 口 猷 弘（昭和55～59年度勤務）

夕刻5時30分頃から、ひとりまたひとり、あるいは数人ずつ連れだつての生徒の登校から定時制の一日が始まる。始業時刻の5時45分にはまだ少し時間があるので何人かの生徒が職員室に顔を見せて「こんばんは」のあいさつをするや、間を置かずその日の仕事場でのことや自分の体調の具合など思いつくままにしゃべりだす。同情する生徒、たしなめる生徒、無関心を装う生徒。職員はと言うと、かすかに微笑みを浮かべながらうんうんとうなずいて聞いている。いつの間にか狭い専任室（職員室）はいっぱいになり身動きがとれない程になっている。やがて始業のチャイムが鳴り、生徒はまだまだ話したいことがあるのと言う様子をありありと浮かべながら急いで教室に向かう。

1時間目終了、給食の時間だ。給食室でパンと牛乳で空腹をしのぎつつ、級友、先輩、後輩とコミュニケーション、一部の生徒は専任室でさっきの話を続き。生徒にとっては言うまでもなく、我々教職員にとっても短いながらこの上なく貴重な時間である。

給食後の睡魔と闘いながら2時間目、3時間目と頑張る。4時間目、仕事の疲れも相まってそろそろどの生徒も限界である。先生方もあの手この手で生徒を眠らせまいと懸命の努力を惜しまない。魅力ある授業づくりの真価が問われるところである。

ついに4時間目終了。しかしこれで一日の終わりとはならない。すぐに部活動が始まるのである。従来からいくつかの部が新設され、自然消滅し、また復活するという繰り返しのを経て、部の数は少ないが連綿と部活動は続けられている。バレーボール、バドミントン、卓球、陸上競技な

ど部員数は少ないがなかなか熱心である。私もバドミントン部の顧問として生徒の効果的な部活の手伝いに汗を流す。1時間足らずの部活の時間はあつと言う間に過ぎ若い生徒にとっては物足りないらしくなかなか終わろうとしない。幸い以前からの決まりがあつて午後10時には仕方なく後片付けをして明日またと下校していく。

以上、私が関わった頃の亀高定時制の一日を思い出しながら綴ってみた。紙面の都合上羅列するのみで残念であるが、新入生歓迎遠足、球技大会、生活体験発表校内大会、予餞会、送別式(定時制独自の卒業式)など生徒とともに経験した様々な学校行事の一コマ一コマが今も鮮明に思い出せるのである。

We are the family ~ あの頃、みんな美しかった

■羽野雅彦(昭和60~61年度勤務)

定時制に勤務した1985年、86年。3、4年生の担任をして卒業生を送り出したことが、私にとっては小さな誇りだった。あの頃の生徒たちはどうしているだろうか。当時のことを振り返りながら、こころの記憶を探ってみよう。

We are the family. あの頃の定時制はまるで家族のようだった。率直で飾りっ気がなく、生徒のことを第一に考えている鈴村謹爾教頭先生が、定時制の親父(おやじ)だった。生徒たちは、学校へ来ると職員室の入り口からひょっこり顔を出す。授業が終わると職員室になだれ込んできているんな話をしてくれる。そうでない生徒も授業が始まる時間になると、どこからともなく集まってくる。生徒といっしょにいて、腹が立ってどなったこともあつたが、感激して泣いたこともあつた。欠席が続くと、気になって電話、職場訪問、家庭訪問。だれもない教室で話し込んだこともあつた。それぞれに事情があることはわかっているが、学校だけは続けてほしかった。なんとしても卒業してほしかった。

定時制教育の真価を問う行事に生活体験発表会がある。このときばかりは、生徒は自分のことを率直に語る。自分を語ることはときに痛みをとまなうが、語り切ったとき、それまでの自分から抜け出し新しい自分が歩き始める。それが成長の証(あかし)だ。歩みのペースはいろいろで、時間はかかるが、定時制という家族のなかで生徒たちは育ち、自分で気づいて、自分で変わっていった。

そして、卒業。生徒にとって、この二文字は格別の意味をもつ。卒業式のあと、中川亮太校長先生を囲んで、「自主自律」の記念碑の前で記念写真を撮ったことを覚えている。みんな晴れやかで、美しかった。あれからずいぶん時(とき)が流れた。私は今年で定年退職を迎える。やっと卒業するが、亀高定時制で過ごした思い出はこころのなかに在り続けるし、愛ある記憶は消えることはない。

亀山高校定時制の思い出を語る

■水谷明弘（平成7～14年度勤務）

私は平成7年4月から平成15年3月まで8年間を亀山高校定時制教員として過ごしました。平成6年度も週2日授業に行っていましたので、9年間定時制にかかわったこととなります。私にとって亀山高校定時制は教員の原点でした。生徒は自己実現のために昼働き夜勉強、そして放課後は部活動と本当に頑張っていたことが今でも記憶に残っています。当時の様子を述べてみたいと思います。

時代背景としては、1990年に入国管理法（当時）が改正され、ニューカマーとよばれる主として南米で生まれた日系二世、三世、四世の外国人の入国が急増することになったのです。当時の日本はバブル絶頂期で工場で働く作業員を大量に必要としていました。彼らは「でかせぎ」と呼ばれていました。そして、自動車工場、家電工場、各種部品工場がある地域に居住することになりました。群馬県大泉町、神奈川県川崎市、三重県四日市市、鈴鹿市、亀山市などに彼らのコミュニティができていきました。

そのような状況の中、亀山高校定時制にも1992年に初めて日系外国人生徒が入学しました。その後年を追うごとにこの日系外国人生徒の在籍が増加していきました。99年度の在籍生徒数を見ると全在籍生徒数43名、内外国籍（ブラジル、ペルー、ボリビア、フィリピン）20名と46.5%と半数近くまで増加しました。これは当時としては画期的な入学試験（面接も作文も母語を可としたこと）や日本語の指導を習熟別に3グループに分けるなど国際化に対応する教育課程を編成したことだと思えます。

次に、日本人生徒と外国人生徒との共生の様子を振り返ってみます。日本人生徒には一度高校生活を経験した者、中学卒業後職に就いたが学問が必要だと一念発起した者、全日制での大人数の一斉授業に馴染めず定時制を選んだ者など様々な理由をもつ生徒が在籍していました。生活経験も知識の習熟度も千差万別、それに加えて外国人生徒（彼らは中学卒業直後に仕事に就くため同年齢がほとんどでしたが）がいるわけですから、自然に任せていては学校は成り立ちません。日本の学校は、学習活動をするという機能体と同じ学級で学校生活を送るという共同体の両方の役目を果たしていますから、意図的なしなかけをしないと学校でのトラブル、暴力、不登校など反社会的、非社会的な行動が頻発に起こることは予期できました。外国人生徒を受け入れることにより、日本人生徒にも生きる力を身につけさせるにはどうしたらいいか、大きな目標です。学校では何度もトラブルが起きました。言葉が分からないから、陰口を言われているのではないか、という誤解からのけんかが最初に起きました。「同じ学校の子」だよ、という仲間づくりから始めていきました。「全校話し合い」をもち、「仲良く学校で過ごすために」という内容で話し合い、校内は日本語で、それぞれの言葉を学ぶ、部活動を一緒に頑張り他校と対抗するなど積極的に共生する意見が多く出され、生徒がつくったルールをみんなが納得して実行していくことにしました。お互い話すことが少なかったのでお互いを知らなかつただけ、そんな結論になるはずです。部活動の成果はすばらしいもので、1年後は定時制通信制大会でソフトバレー優勝、バドミントン団体三位など結果が出てきました。陸上部は休日に他校の全日制と合同練習させてもらい全国大会二位、三位まで成長しました。文化祭も日本、ブラジル、ペルー、ボリビア、フィリピン料理やサンバ、独楽回し、餅つきなど自然に学校で共生ができていたように思います。

